第 1 特別委員会

TC-1.1 用語[†]

専門会員 大場 信英*

この技術委員会は 1 回開かれただけで、しかも 2 時間ほどで終了した。大体いつの大会でもこのようであるが、これはこの委員会の活動が不活発ということではなく、実は委員長、書記、各特別委員、他の TC の委員など、さらに他の国際機関の関係者などの相互間で常に直接の、あるいは文書による審議が行なわれていて、大会での審議はその経過報告、今後の方針およびごく限られた重要事項の審議だけにとどまるからである。今回も主として J. Terrien 委員長（フランス）自らが議事進行と報告とを行ない、ほかには書記の H. Moreau（フランス）、委員の L. Morren（ベルギー）、TC-1.2 の用語小委員会委員長の G. Bauer（西ドイツ）らが、補足的説明を行なっただけであった。

CIE 用語集第 3 版は 1970 年に刊行されたが、用語というものの性格上、絶えず追加、廃止、修正が必要であり、その仕事はずっと続けられ、特に前回のロンドン大会以降は活発になり、今回の大会前にすでに第 4 版の原案のかかなりの部分ができ上がっている。これらの原案は本委員会の主要メンバー、関連する他の各 TC の用語小委員会の委員長らの協議によって作成されたが、前の第 3 版と同様に、IEC（国際電気標準会議）と共通の用語集ということで、IEC の関連委員会とも協議を行なった

ものである。これら第一次案（英文）はでき上がった章ごとに順次に TC-1.1 の各委員に配布されており、コメントが求められ、同時に他の国際機関との協議も続けられ、その後、第二次案の作成および仏文、独文への翻訳が行なわれて各国照明委員会に配布され、承認が求められることになる。それにはまだ 1～2 年かかり、その後ロシア語への翻訳や IEC との最終協議などを経て、たぶん、次回の 1983 年大会ごろに刊行になるであろうとのことであった。

ではさらに、その次の第 5 版の刊行はどうかといえ、あまりしばしば変更するのは用語の性格上好ましくない、たぶん 15～20 年後がよいであろうと委員長が述べた。

原案作成上最も苦心を要する点は、各 TC などから持ち出される用語の総数は 2,000 以上にものぼり、これをいかに適当な数にまで減らすかということであった。それについて、委員長や他の委員から方針や意見が述べられたが、ここでは省略し、ただ一つ各 TC 相互間のさらに密接な協議が必要であると強調されたことだけを記しておく。

（受付 1979 年 10 月 1 日）

TC-1.2 測光・放射測定[†]

専門会員 鈴木 守**

1. ま え が き

筆者は TC-1.2 の特別委員をしている関係で、今回の CIE 大会において、TC-1.2 の会議の会場その他の世話

をすることになった。幸い各国の参加者の大部分とは、1977 年の技術委員会や、測光・放射測定諮問委員会でお目にかかった間柄なので気安く接することができ、それほど気苦労もなく無事役目を果たすことができたよう

[†] Terminology

* 電子技術総合研究所 TC-1.1 特別委員 Nobuhide Ōba

[†] Photometry and Radiometry

** 電子技術総合研究所 TC-1.2 特別委員 Mamoru Suzuki

に思う。また、会議のほうも委員長が欠席のため、委員長代理によって議事を進めた以外はすべて順調であった。ここでは、準備委員会と本会議 (M1, M2) の模様について報告することにする。ただ、議事録が届いていないため、不正確な記述や誤解している点があるかもしれないので、その点をご容赦願いたい。

2. 会 議 日 程

TC-1.2 関係の活動はきわめて活発で、その会合は次のように開催された。

準備委員会	： 8 月 20 日	9 : 00 ~ 16 : 30
本会議 (M1)	： 8 月 22 日	10 : 15 ~ 13 : 15
本会議 (M2)	： 8 月 23 日	10 : 15 ~ 13 : 15
合同委員会 (J-II)	： 8 月 25 日	14 : 30 ~ 17 : 30
合同委員会 (J-IV)	： 8 月 28 日	10 : 15 ~ 13 : 15

合同委員会を除く TC-1.2 の会合は、委員長 Sanders (カナダ) の依頼を受けた Blevin (オーストラリア) が司会して行なわれた。また、書記として Kok (南アフリカ) が、英、独、仏語のリポーターとして Hengstberger (南アフリカ)、Bauer (西ドイツ)、Morren (ベルギー) がそれぞれ指名され、筆者はスチュワードとして会場のめんどろを見ることになり、南条がこれを補佐した。

3. 準 備 委 員 会

Blevin の挨拶、書記ならびに各リポーター選任の後、用語 (主査 Bauer)、光源の分光放射測定 (主査 Jones)、安定な標準光源 (主査 Moore)、「光の測定の原理」の改訂 (主査 Blevin) について、各小委員会の主査より報告があり、討議が進められた。

TC-1.2 関係の用語では、photon quantity の基本単位として ps^{-1} ではなく s^{-1} を用いること、spherical irradiance と cylindrical irradiance を用語として採用することが了承された。

Jones (イギリス) の用意した光源の分光放射測定に関する報告は、技術委員会報告として出すことが決まった。今回の報告案では前回の原案の一部を修正したほか、に、「分光放射測定の基本原理」という付録が加えられ、測定法の理論的な裏づけを与えている。Jones によれば、NPL 報告として CIE よりも先に出版することが予定されている模様である。

「光の測定の原理」の改訂版となる「物理測光の基礎」も、国際度量衡総会の決定をまっけて、CIE の勧告としてではなく、技術委員会報告として出版することが確認された。安定な標準光源に関する報告は、1980 年の中ごろまでに第二次案が回送される予定で、標準光源に関する参考文献を主査あてに送るよう要請があった。

午後の会議ではまず、flash photometry に関する報

告と討論が行なわれた。これは、今後の委員会活動の一つの核として取り上げる意図の下に、委員長が事前に連絡を取り、準備をしてきたものである。日本における flash photometry の現状については、大日方と大場 (発表者大場) が報告した。Watson (アメリカ) はアメリカにおける国内比較の結果について報告した。これによると測定値のばらつきは約 10% で、測定値が二つに分かれる傾向を示した。これらの発表は今後の活動計画の審議に大きな影響を与えた。

4. 本 会 議 (M1)

まず、TC-1.2 の progress report (1975~1979) が Blevin によって報告され、次いで、「最大視感度 K_m の測定」と題する個人論文が、Bauer によって発表された。 K_m の実験的決定は二通りの方法で行なった。第 1 の方法は白金点黒体を実現し、これを 2 種の標準電球に移した後、絶対校正した $V(\lambda)$ 受光器を用いて測定し、平均値として 683.6 lm/W を得た。第 2 の方法である分光放射測定に基づく K_m の決定値は、約 1.5% 低い値となった。この二つの方法による実測値の差は NPL でも経験しており、問題がある旨 Jones から発言があった。筆者も電総研で同様の経験をしているが、その原因を温度目盛に求めるべきかどうかははっきりしない。

少憩後、「物理測光の基礎」に関する技術委員会報告原案 (測光の原理の改訂版) の説明、用語小委員会の報告、「安定な二次標準光源」に関する技術委員会報告原案の説明が行なわれた。続いて、高圧水銀ランプ測定の国際比較、および発光ダイオード (LED) 測定の国際比較について Schanda (ハンガリー) が説明した。高圧水銀ランプは、三つのグループに分けて順次回送する方式をとるようであり、LED は温度コントロールしたボックスを付属している。

5. 本 会 議 (M2)

「光源の分光放射測定」に関する技術委員会報告原案の説明の後、木滑らの個人論文「カラーテレビ用ブラウン管の分光放射測定」と題する個人論文の発表があった。これはマイクロプロセッサによって制御された分光放射計を作って、カラーブラウン管に特有な測光上の困難を解決した報告で、測定の正確さを得るのに十分な考慮が払われている。また、木滑の発表はスライド、英語、発表態度など、すべての点で最高であったというのが日本人参加者の一致した感想であった。

コーヒーブレイクの後、TC-1.2 の progress report を承認し、新しいプロジェクトならびに新しいワーキングプログラムについて審議した。その結果、flashing lights の測光に関する小委員会を、Watson を中心と

し、大場、Schanda またはその指名する人を加えて発足させることになった。このほか紫外の分光放射測定、メタルハライドランプの測光、black coating の反射率測定、ゴニオホトメトリー、レーザなども議論されたが、他の技術委員会との調整を必要とするものが多く、決定に至らなかった。

その後、新しい定義のルメーンを SI の基本単位として採用するよう求める勧告案について Jones が説明し、これを採択した。

6. お わ り に

最後に若干の感想を述べてみたい。まず、日本の若い人々が世界各国の第一線の研究者、技術者とじかに接し

て意見を交換し、また国際会議のふん囲気を経験できたことは貴重な成果であったと考える。この経験が今後に生かされることを期待したい。

次に、照明界の長老である松田長三郎先生が終始熱心に参加されておられた姿に深い感銘を受けた。会場後方に立っておられるのを拝見して、筆者は思わず前のほうの席にご案内したような次第である。

このほか、TC-1.2 とは直接の関係はないが、いろいろな事情から、外国人参加者の苦情の窓口を務める羽目になり、大会実行委員会のかたがたにご迷惑をかけたが、そのつど適宜処置していただいたことを深謝する。

(受付1979年10月17日)

TC-1.3 測 色[†]

専門会員 納 谷 嘉 信*

TC-1.3 の委員長は Dr. R. W. G. Hunt (イギリス) で、次の 5 委員会と一つのタスク・フォースからなる。

色彩用語小委員会 委員長 Dr. R. W. G. Hunt
色順応小委員会

委員長 Dr. C. J. Bartleson (アメリカ)
標準光源小委員会 委員長 Dr. Y. Nayatani (日本)
色差小委員会 委員長 Dr. A. R. Robertson (カナダ)
メタメリズム小委員会

委員長 Prof. E. Allen (アメリカ)
白色度タスク・フォース

委員長 Dr. A. Brockes (西ドイツ)
会期前および会期中、次の会合が持たれた。議事の概要とともに以下に示す。

1. 予 備 会 合 8月20日(月) 9:00~13:15

各小委員会報告と討議。特に標準光源小委員会で過去 10 年進めて来たテクニカル・レポート案“A method for assessing the quality of daylight simulators for colorimetry”の討議が主となった。

2. 本 会 議 (I) 8月23日(木) 14:30~17:30

委員長の総合報告、標準光源小委員会、白色度タスク・フォースの報告のほか、次の 2 論文が発表された。

F. J. J. Clarke: “Practical standard illuminant

図 1 TC-1.3 技術委員会の予備会合の風景
(1979年 8月20日)

representative of interior daylight”

A. S. Stenius: “A comparison of methods for visual determination of whiteness”

この会合で、TC-1.3 標準光源小委員会の前述のテクニカル・レポート案は原則的に承認された。

3. 本 会 議 (II) 8月24日(金) 10:15~13:15

色差小委員会、色順応小委員会、色彩用語小委員会、メタメリズム小委員会の報告と討議のほか、1983年までの研究計画の討議がなされた。次の論文が報告された。

K. Ikeda, M. Nakayama, and K. Obara: “Comparison of perceived colour differences of colour chips with their colorimetric ones in the CIE 1976 $L^*a^*b^*$ and the CIE 1976 $L^*u^*v^*$ uniform colour spaces”

[†] Colorimetry

* 電子技術総合研究所大阪支所 TC-1.3 特別委員
Yoshinobu Nayatani

その他、8月28日(火)には TC-1.2, 1.3, 1.4, 3.2 の合同技術委員会が持たれている。これについては別記する。以下、各小委員会ごとに報告事項、討議および将来計画の概要を示す。

標準光源小委員会

テクニカル・レポートについて、光源の色度許容限界をさらに狭くすべきであるとする提案、評価に平均メタメリズム指数を採用するのでなく、最大メタメリズム指数を用いるべきとする提案、標準光源として許容しうる評価値限界の設定は、時期尚早という意見、紫外部評価についてドイツ提案¹⁾を可とする意見などがあった。これらの個々について討論の結果、原案²⁾を若干修正の上、承認されることとなった。

今後の方向は、テクニカル・レポートの完成、テクニカル・レポート提案の試験方法の使用経験の蓄積、標準光源として使用しうる良い人工光源の開発である。さらに、代表的なけい光灯について分光分布を与えることが要望されている。これはけい光灯の標準の光をつくることを目的としない、種々の物体色の評価をけい光灯などで行ないたいときに、代表的なものを定めておくことが便利であるという発想による。

なお、Dr. Clarke は、D₆₅ と窓ガラスを組み合わせた屋内標準光 ID₆₅ を提案した。これについては再三討論が行なわれ、光源としての実用性は認めるとしても、標準の光としては採択されないこととなった。

色順応小委員会

1977年までの色順応実験、および予測研究の結果が委員長により報告された³⁾。予測公式も Richter, Pointer, Bartleson Nayatani らによって提案されつつある。

実験としては、Breneman の報じている、順応輝度を高めると von Kries 係数則に従うという結果が興味深い。筆者らの Interlinkage model⁴⁾および Non-linear model⁵⁾だけがこの実験事実をよく説明する。

色順応小委員会の今後の計画は、現在までの提案に基づいて、1981年までに単一の予測式にしぼりたい。それを CIE の勧告とすることを期待している。このため生理的原刺激の選定、順応輝度レベル変更の影響を予測式へ導入すること、さらに多くの実験結果の集積などが要望されている。1984年を小委員会の第1段階の研究完成の年としたい。

色差小委員会

小委員会は、色差評価実験を組織的に行なうためのガイドライン⁶⁾を定め、その方向に沿う研究を進めている。その内容は五つの“標準”試験色の規定、種々の評価方法の比較、種々のパラメタの影響の研究、一つの実験条件での完全なデータの集積、新色差式の完成。

しかし、現在の色差式は当分変えない。日本色彩研究

所は、上のガイドラインの5色を示す色票群を作成、希望者に頒布する旨のアナウンスが、川上元郎教授より述べられた。

次の4年間の主要課題は、評価方法とパラメタの影響の研究が精力的に行なわれよう。これらの研究はもちろん D₆₅ に近い昼光下で行なわれる。

最近、池田紘一博士らの研究に見られるように、A 光下の色差の検討が、色順応の研究と関連して各国で行なわれている。色差式は元来、昼光下で用いるために作られたのであるが、順応を変化した場合の均等色空間の問題も今後の一つの課題であろう。

色彩用語小委員会

CIE 国際照明用語集第4版の完成のため、TC-1.1 と協力して進めている。すでにそのための測色用語の見直しは1977年までに完成している。

メタメリズム小委員会

色比較には条件等色の問題が付随する。この場合、観測者ごとに等色の判断が異なる。このような等色における個人差を平均的に取りまとめて評価法を定めようとする。委員長は欠席で、あらかじめ委員長より提出された案の討論を行なった。あまり価値の無いことが認められ、再び小委員会へ差し戻しとなった。

白色度タスク・フォース

1975年まで続けられた、白色度小委員会の成果を受け、白色度評価のための線形公式を提案している。委員長は欠席で、Dr. E. Ganz が代理で報告した。将来計画として、線形公式の最終版の完成と経験の集積が考えられる。もし、可能なら1981年に白色度公式の CIE 勧告案を作成したい。

その他、TC-1.3としては CIE publication No. 15⁷⁾ の第2版の作成も計画している。

今回は1981年9月30日～10月1日、ベルリンでの第4回 AIC の後、ロンドンで開催される。ちょうど CIE 1931表色系完成後50周年に当たる。

参 考 文 献

- (1) DIN 6173, Blatt 2, (1975)
- (2) 納谷ほか：照学誌 **62** (昭53) 614 にほぼ近い。
- (3) C. J. Bartleson: Color Res. Appl. **3** (1978) 129
- (4) K. Takahama et al.: J. Opt. Soc. Am., **67** (1976) 651
- (5) Y. Nayatani et al.: CIE 1979 発表論文 P. 79-80 (1979)
- (6) A. R. Robertson: Color Res. Appl. **2** (1977) 7
- (7) CIE Publication No. 15, Colorimetry (1971)

(受付1979年10月1日)

TC-2.2 受 光 器†

終 身 会 員 野 中 守*

TC-2.2は1975年のロンドン大会において、「放射の受光器および測定システムの特性を研究し、これらの特性を規定、測定する標準的な方法を開発する」技術委員会として発足した。以後、委員会は毎年、会議を開催して来たが、今回の京都大会においては、次の技術委員会が行なわれた。

8月24日 14:30~17:15 準備委員会

8月25日 10:15~13:15 本会議

14:30~17:30 TC-1.2, TC-2.2, TC-

2.3 の合同委員会

これらの会議で報告、あるいは討議された主なテーマは次のとおりである。

- (1) 過去4年の進歩、活動報告 (TC-2.2 の委員長, J. Schanda (ハンガリー))

Absolute radiometer の研究がカナダ、日本、イタリア、南アフリカ、アルゼンチンなどで行なわれた。カナダ、日本、アメリカなどでは、受光器の分光感度、直線性、温度特性、角特性などが測定された。また、新しいゴニオフォトメータがドイツ、ハンガリーなどで研究、製作された。

Absolute radiometer, Si-cell, radiometer (photometer), colorimeter, レーザの測定、用語については小委員会を設けて研究、調査が行なわれた。

- (2) テクニカル・レポート “Methods of Characterizing the Performance of Radiometers (Photometers)” 7th Draft ……C. L. Sanders (欠席のため Schanda が代行)

Radiometer (photometer) が、精度の上から3クラスに分けられ、許容誤差などが規定されている。たとえば、最も精度の高いクラス1の測光器では、下記の誤差が示されている。

A光源に対して	±1.2%
視感度誤差 (3波長けい光体のけい光ランプ, 高圧水銀ランプ, 高圧ナトリウムランプ, メタルハライドランプ(2種))	±0.5%
斜め入射光誤差	±5.0%

非直線誤差	±0.2%
読み取り誤差	±0.2%
疲労	±0.5%
温度特性	±0.05%/°C
周波数特性	±0.2%
偏光誤差	±1.0%
照度むら誤差	±5.0%

- (3) **Absolute Radiation Detectors**…F. Hengstberger

Absolute radiometry に関するテクニカル・レポートの原稿を準備中である。準備委員会において、小野 (計量研), A. Corrons (スペイン) による短時間の論文発表があった。

- (4) **Si-Cell**…W. Budde

Si-Cell の分光感度および直線性の測定に関する国際比較の中間報告があった。参加研究所は15箇所で、Si-Cell は UV-444B (E. G. & G.) が使用されている。分光感度測定は波長範囲が350~800 nm で相対値, 546.1 nm で絶対値, 直線性測定は0~10 μ A の範囲で1 μ A ステップの補正係数の測定である。

- (5) **Color Measuring Instruments** (G. Lukács), **Laser Radiation Measurements** (J. Geist)

“Metrological Qualification of Colorimeters” の1st Draft が作成され配布されているが、Lukács が本大会に欠席したため討議はなかった。また、レーザ放射の測定については、Geist が小委員会の委員長を辞任したまままで進展がなく、討議は行なわれなかった。

- (6) 論 文 発 表

8月25日の本会議において、下記2件の発表が行なわれた。

- “Characteristics of Pyroelectric Cellasa Radiometric Detector” by T. Katsube and Y. Nakagawa
- “Empfänger zur Messung photobiologish wirk-samer Strahlung” by G. Geutler

- (7) 今 後 の 計 画

次のテーマが提案された。

- (a) 受光器の特性およびそれを決める技術の研究。
- (b) absolute radiation detector の特性、使用技術の研究およびテクニカル・レポートの作成。
- (c) 前述のテクニカル・レポート “Methods of Ch-

† Detectors

* 朝日立製作所中央研究所 TC-2.2 特別委員

Mamoru Nonaka

aracterizing the Performance of Radiometers (Photometers)”の補足.

- (d) 測光実験室で使用する器具, 装置のチェックガイド作成.
- (e) テクニカル・レポート “Methods of Specifying the Performance of Colorimeters”の作成.
- (f) レーザ放射を測定する問題の研究.
- (g) 受光器, 放射計, 測光計, 測色計の compendium 作成.
- (8) **TC-1.2, TC-2.2, TC-2.3 の合同委員会**
(委員長: J. Schanda)
- (a) absolute radiometry

Absolute radiometry に関しては, 従来から TC-1.2 で取り扱っている. absolute radiometry は TC-1.2, absolute radiometer は TC-2.2 のテーマであるとか, あるいは TC-2.2 の分野は, TC-1.2 よりも industrial¹で less basic であるとかというような意見が出た. さらにまた TC-1.2 と TC-2.2 は, 一つの技術委員会にすべきであるなど, 自由討論でいろいろな意見があった.

(b) 分光感度測定

分光感度測定の意味するもの, 国際比較, アメリカ国内の相互比較, あるいは測定精度の問題などが論ぜられた.

(c) 偏 光

偏光の問題が起こる測光, 測色の例が出され, モノクロメータ, 光源, 照明器具, 配光測定装置などの偏光特性に関するデータが挙げられた. また, 反射率測定における偏光誤差が論ぜられた.

合同委員会は自由討論の形で行なわれ, 各自は必ずしもそのとき正確なデータを手元に持っていたわけでもないので, 委員長のリーダーシップ不足も重なって実のある成果は得られなかった.

(9) TC-2.2 の次回の会合

一応, 毎年委員会を開催することになり, 次回は1980年9月15~17日, オーストリアのウィーンの予定である.

(受付1979年9月20日)

TC-2.3 照 明 材 料[†]

専門会員 馬 場 護 郎*

CIE 京都大会において, TC-2.3に関連するものとして, 以下の会合が開催された.

1. 予 備 会 合

TC-2.3の予備会合として, 次の三つの小委員会の会合が8月20日に開かれた.

- (1) けい光に関する会合で, 技術報告の修正が討議された.
- (2) 光沢小委員会で, 視感実験計画の報告と, 打ち合わせが行なわれた.
- (3) 再帰反射小委員会で, 技術報告案が審議された.

2. 本 委 員 会 8月21, 22日

F. Grum が議長となり, 次の報告が行なわれた.

2.1 委員長報告 (F. Grum)

委員長は, 過去4年間における TC-2.3 および各小委員会の活動について報告したのち, テクニカル・レポートについて次のように報告した.

TC-2.3に関するテクニカル・レポートとしては, “物

体反射標準の特性と測定値に関する出版物の概観”, および“絶対反射率測定法”の2報告が, 技術運営委員会において承認され, 近く CIE 出版物として出版される.

用語についての報告は, すでに TC-2.3 特別委員の同意の上, TC-1.1 に送付されている.

その他, けい光色, 再帰反射, けい光測定, 濁濁媒体, 光沢, 偏光についての技術報告が完了, または準備中である.

2.2 各小委員会報告

(1) 用 語 (F. Billmeyer, Jr. for M. Pearson)

この小委員会では, 国際照明用語集の修正および追加を求める原案を作成し, 本年1月, TC-1.1へ送付した. この原案には90の用語が含まれているが, うち70はけい光および再帰反射に関する新しい用語である.

(2) Gloss (J. Christie)

光沢に関する用語と定義が, 物理量と心理量の関係を含めて討議されている.

光沢の尺度構成を目的とする視感実験が, アルゼンチン, 英, 米で進行中であり, いくつかの成果が現われている.

光沢測定法の調査が進んでおり, この中には標準物体

[†] Materials

* 日立製作所那珂工場 TC-2.3 特別委員 Gorō Baba

の種類、校正方法、校正機関の表が含まれている。

報告後の討論で、現在光沢の一次基準面として用いられている黒ガラス面は、表面の劣化が生じるので、石英（楔形）の面が良いとのことで種々意見が出された。

(3) **Luminescence** (K. Mielenz)

けい光剤を含むプラスチックおよび水溶液について、けい光測定との相互比較が、各国の参加を得て行なわれたが、その結果にはかなりのばらつきがあり、問題を残している。

けい光測定に関するマニュアルを作成中で、大半の原案は完成し、残りの完成を待ってテクニカル・レポートを作成する。

けい光測定に関しては、安定で信頼性の高い標準物体の使用がきわめて重要であり、今後の活動に採用する。

(4) **Colorimetric Aspects of Luminescence** (F. Billmeyer, Jr.)

テクニカル・レポートとして、“標準の光の下でのけい光試料の分光ラジアンズ・ファクタの予測方法”と題するテクニカル・レポートを作成したが、これは一般に普及している一分光器、積分球法の測定器を用い、どの程度、標準の光 D_{65} の下でのけい光色を予測し得るかを検討したものである。

(5) **Standards & Techniques** (Grum for W. Erb)

さきに述べた二つのテクニカル・レポートを作成し、近く刊行される。透過率測定の国際相互比較が Fillinger が主宰して進行中である。将来の計画として測色器を校正するのに使用する反射標準、300 nm～3 μ m の範囲の反射標準の調査、検討を行なう予定である。

(6) **Polarization** (F. Clarke for R. King)

さきに、“偏光した光：その定義と用語”の報告を作成したが、今回“光学装置における偏光”に関する報告原案を作成し、各国委員に回示した。この報告は光学装置に用いられる各種光学要素の偏光性、偏光素子の性能、光源および受光器の偏光性について述べたものである。今後の方針として、今までの報告をさらに発展させ、各種測定器における偏光の影響、およびその計算方法について報告を作成する。

(7) **Turbid Media** (F. Billmeyer for R. Bostick)

Turbid Media の測定に現在用いられている装置、および方法の調査を完了し、報告を作成中である。

次いで、半透明物体の透過率、反射率を測定する際に望ましい方法を検討中であるが、現状では測定法による測定値の違いが大きく問題がある。今後の計画として、Contrast Ratio の測定法、および予測法が重要である

ので、これに関する推奨案を検討する。

(8) **Retroreflection** (J. Moreman)

再帰反射性材料についてのテクニカル・レポートを作成したが、この報告には、使用すべき用語、角度基準系、再帰反射標識の測光規格、装置の校正方法、再帰反射性道路マークの測光などの項目が含まれている。

この報告は、技術運営委員会に送付されるが、将来 CIE 公式勧告案となることを期待する。

2.3 今後の運営方針

(1) **Gloss**

各種光沢段階の試料について、変角光度測定と視感評価の関係を検討する。

(2) **Luminescence**

けい光に関する小委員会と Task Force を合併し、けい光測定に使用する標準物体に関する Field Test を続行する。

(3) **Polarization**

種々の測光法において、偏光がどのように影響を与えているかの解析を行ない、技術報告を作成する。

(4) **Standards & Techniques**

透過率測定の国際相互比較を続行するほか、測定装置の誤差診断、標準板の変角光度測定を行なう。

(5) **Turbid Media**

半透明物体の測定について報告をまとめる。

(6) **Retroreflection**

再帰反射測定についての技術報告をまとめるほか、CIE 公式勧告案作成の作業を行なう。

2.4 論文発表

Main Meeting に際し、次の4論文が発表された。

(1) Paper 79,26 “Über die Messung von Reflexionsgrad und Transmissionsgrad bei gerichtetem und diffusem Lichteinfall”, J. Krochman.

(2) Paper 79,27 “Specification of luminescent colors for visual signaling”, H. Terstiege.

(3) Paper 79,28 “Evaluation of method for predicting the colors under standard illuminants of fluorescent samples measured under an arbitrary source” F. Billmeyer, Jr. & T. Chong

(4) Paper 79,29 “Factors affecting the metrology of retroreflecting materials” W. Venable, Jr., H. Stephenson & H. Terstiege

(受付1979年10月19日)